

第5回関西学院歴史サロン

(二〇〇一・六・二八)

演題 ノーマン家の人々の生と挫折

—『関西学院百年史』外伝—

講演 竹本 洋

司会 井上 琢智

井上 それでは室長の山本に代わりまして司会をさせていただきます。よろしくお願いいたします。よろしくお願いたします。今日講師をしていただきます竹本洋先生を簡単に紹介したいと思います。関西学院で私と同じ分野の専攻で、経済学部で経済思想史、経済学史の専門家として、イギリスの一八世紀の経済学者のジェームス・ステュアートの研究で著名であります。日本学士院賞をこの研究で取られました。竹本先生は関西学院に来られてまだ四年しかたっていないのですが、そのような新しい方に我々が作りしました『関西学院百年史』の業績を新しい目で、そして批判的な目でぜひ読んでいただきたい、そしてその上で、この歴史サロンの場

で何か話していただけませんかというお願いを山本室長がされました。そこで竹本先生はいろいろご苦労になりました。結局、私たちが『百年史』に十分書けませんでした。私自身も実は今日もお話に出てくるハーバート・ノーマンについては、昔出ました岩波の全集で知っていました。ただそのノーマンが関西学院と関わりがあるなどということは、ごく最近まで知りませんでした。竹本先生は、このハーバート・ノーマンを含めたノーマン家の人々と関西学院の関わりについて、非常に詳細な研究調査をしていただきました。まさに書評をお願いしたつもりが、一

つの研究をしていただいた形になって、その点ではお詫びしなければいけないと思っています。今日、その研究の成果の一端をお話いただくことで、関西学院の歴史に一つの新しい事実とその重要性が付け加えられることになると思っています。それでは、よろしくお願いいたします。

斜めからの『百年史』

竹本 ご紹介いただきました竹本です。今、井上さんから話がありました、私は関学の出身者ではございません。縁があつて四年前に本学に呼んでいただきました。そういう面では、関学の歴史とか雰囲気とかを若い時代に肌で感じた者ではございません。昨年、山本教授から『関西学院百年史』を読んでコメントをしろという宿題をいただいた時に、私には荷が重い課題だと感じました。そこで急いで『百年史』を読みましたが、これは大変な労作でして、それを正面からコメントといえますか書評することは、関学とある意味では正面から向き合うことになるわけですから、今の時点で私が軽々に何か申し上げることは却って誤解を生むと思ひまして、『百年史』を斜めから読むことができないかということを考えておりました。その時一つの

ことを思い出しました。有名なハーバート・ノーマンに『クリオの顔』という最初岩波新書で出てそのあと文庫にもなった本があります。これを若い時に読んだことがありましたので、このなかにノーマンが関学で講演をしたものがあったことを思い出したのです。これで何かお話が出来るのではないかと思つていろいろノーマンについて調べ始めましたところ、ノーマンの実兄、それからお父さん、さらにその他のノーマン家の人達が関学に関係していたということが次第にわかつてまいりました。今日は、そうしたことを泥縄式に勉強した一種の中間報告とお聞きいただければと思います。本以外にもここに三つのファイルにいったいになるくらいの資料が集まつております。この間には、実は学院史編纂室の池田裕子さんに、大変なご協力と示唆をいただきました。御礼を申し上げます。

ノーマン家の人々と関学

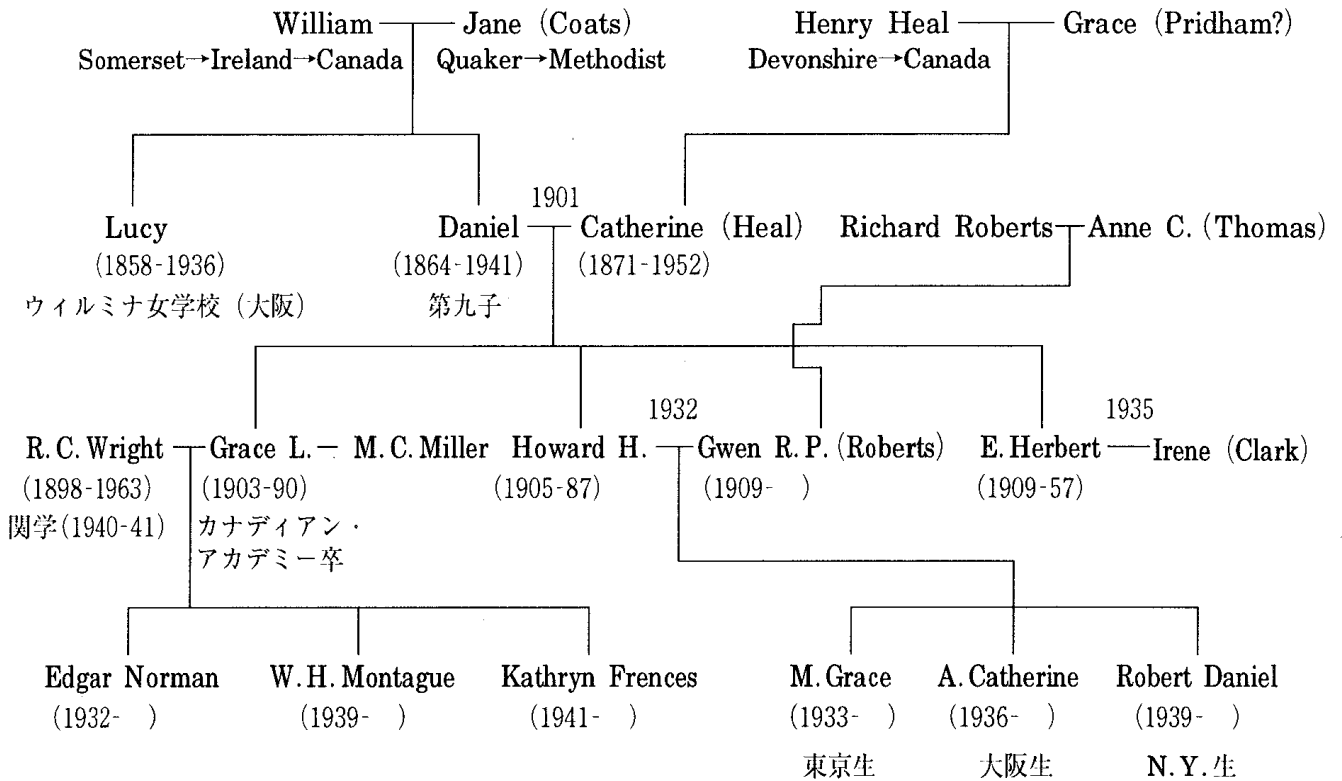
そこで今日は一時間という短い時間ですので、なるべくかいつまんでお話しさせていただきますが、お配りしている資料はまず最初の「ノーマン家の人々の生と挫折」と書いた二枚もの（一一四―一一八頁参照）は、今日お話しする

第5回関西学院歴史サロン

要旨でございます。それから少し大部な横向きでコピーがしてあるものは、一枚目がノーマン家の家系図（下図）、もちろん略図であります。その裏側がノーマン家の人々の年譜（本記録では掲載割愛）です。年譜の一番右の欄は、ノーマン家に関係すると思われる社会のいろんな事件を書いております。一応二〇〇一年五月までの事を書いております。それからもうひとつは、ノーマン家の人々の主著作とか論文の業績リスト（本記録では掲載割愛）を付けておりますが、ハーバート・ノーマンは非常に有名ですし、また岩波の全集等の後に著作リストがございますのでハーバート・ノーマンの著作リストは省いております。

以上がお配りした資料の紹介ですが、まず最初に横向きの家系略図を見ていただきたいと思います。これで簡単にノーマン家の人々と関学との関わりをお話したいと思いますが、先程から名前が出ているハーバート・ノーマンというのは上から三段目の列の右側の方に載っている人ですが、その左が実兄のハワード・ノーマンです。その奥さんがグエン・ノーマン、それからハワード、ハーバート兄弟のお姉さんがハワードの左のグレースという女性です。この三人のお父さんとお母さんがダニエルとキャサリンです。小さいことですが、資料によってはキャサリンの頭文

ノーマン家の家系略図



字がKになっているものもあるのですが、本人のサインでC、つまり Catherine であることを今回確認しました。ダニエルの父母は一番上にありますようにウィリアム・ノーマンとジェーン・ノーマンで、彼は九番目の子供になるわけです。ウィリアムはイギリスのサマーセット州から一時アイルランドに移って最終的にはカナダへ移住して来た人です。ジェーンの家もそうです。それからダニエルの妻になりましたキャサリンの旧姓はヒールですがキャサリンの父母もまたイギリスからのカナダへの移住者です。従ってダニエル、キャサリン夫妻というのはイギリスからカナダへ移住した人たちの子孫といえますか子供同士であります。その二人の子供としてグレース、ハワード、ハーバートという三人の子供たちが誕生いたしました。このなかで関学に関係いたしますのは、ダニエル・ノーマンとその長子であるハワード、ハワードと結婚したグエン、それから弟のハーバートそしてお姉さんでありますグレースの夫ライト、この人たちが関学にそれぞれ関係した人たちです。ハーバートは、日本では有名ですし、今日では世界的にも有名であるといってもよろしいと思います。しかしこういう言い方は変ですね。ハーバードはカナダ人ですから日本で有名だということは世界的に有名だということになり、

あらためて世界的に有名になったというのはおかしいことです。しかし自国で余り知られていないけれども外国で有名だということは、外国人でも日本人でもよくあることです。それはともかくハーバートはノーマン家のなかでは一番関学に縁が薄いかもしれません。しかし、ハワード、グエン、ライトそしてダニエルというハーバートに繋がる人たちは、より関学に深い縁を持った人たちです。そのことはこれからお話いたします。

正史と外史

さて本題に入ります前に、本日のタイトルについて一言申しあげたいことがあります。主タイトルの「ノーマン家の人々の生と挫折」に副題として『関西学院百年史』外伝」を付加しました。会社であれ大学であれあるいは政党であれ、いろんな組織はある年月歴史を刻みますと、自分の組織の歴史を書きたいという意欲を持つようになりま。それは国家でも同じで、『日本書紀』のような、日本の正史の作成が試みられたりするわけです。そういう正史に対して正史とは違う外史、例えば頼山陽の『日本外史』なんていうものは有名でありますけれども、そういう外史

というものが正史と他に成り立ちます。その外史と正史の関係を意識して、外伝というような副題を今日掲げましたけれども、その意味は、自ずから後の話でわかると思いますので、正史と外史をどういう関係と捉えるべきかという一般的な問題は、今日は深く立ち入らないつもりです。

「挫折」の含意

それから「ノーマン家の人々の生と挫折」という主タイトルも大げさなものになってしまいました。「生」の方はともかくとして「挫折」という言葉を使うのに、私は少し躊躇いたしました。それは人にはそれぞれの人生があって、他人が外からあれこれ申し上げるのは非常におこがましいことですし、不遜な態度だろうと思うわけです。したがって私はノーマン家の人々の人生を挫折という形で結論づけようという意図はありません。誰にでも思い通りにいかない、つまりこうしたいんだが結果としてそうならざるを得なかった、ということが大なり小なりあるはずです。そういうことはノーマン家の人々にも同じ様にあったのだと、そういういわば思い通りにいかない人生というものに対する私なりの共感の意味で挫折という言葉を使わせて

いただきました。

再評価されるハーバート

そこで最初に今日の話のきっかけとなりましたハーバート・ノーマンが関学で講演したことについてお話を申し上げたいと思います。ハーバート・ノーマンについては先程井上さんも少し触れられましたけれども、近年といえますか今年になって、再評価の動きが日本でも出ております。ひとつは岩波書店から『ハーバート・ノーマン全集』が今月再刊されております。あるいは東京にありますカナダ大使館が、ノーマンを追慕するシンポジウムを先月の末に開きました。私が今日ノーマンを取りあげるのは、そういう再評価の動きを知ってそれに悼さしたいということからではなくて、あくまで余り知られていない関学との関わりを紹介したいからです。

関学とハーバート

ハーバート・ノーマンは一九五五年、今から半世紀近く前ですが、一九五五年の五月二十三日に関西学院に来学し

て講演をいたしました。その記録が『クリオの顔』という本の中のなかに載っております。興味がおありの方は是非読んでいただきたいと思えます。内容は後から簡単にご紹介いたしますけれども、いまでも彼の講演内容はけっして古くなつていません。むしろ彼の言っていることの重さというものを実感できるわけでありませう。その『クリオの顔』の末尾に解説文が付けられています。それによりますと、ノーマンは関学で講演を行ったときに前置きがあつたようです。ダニエルの子供たちは三人とも神戸に現在もおりますカナディアン・アカデミーを卒業していますが、そのカナディアン・アカデミーにハーバートが在学しておりました時に、当時の関西学院は原田の森にありましたから、関西学院のキャンパスをよく訪れたようであります。そして構内のことや先生方をよく知っていたというようなことがそこに書いてあります。アウトターブリッジ先生の名前も出ております。そしてカナディアン・アカデミーと関西学院の中学部の野球試合にもカナディアン・アカデミーの一員として参加し関学と戦つたということも書いてあります。従つて、ハーバートは少年時代から関学のことをよく知っていたといえますか、関学には馴染みがあつた人であります。例えば、ハーバートのお父さんダニエルは、宣

教師でありますからそのミッシヨンの評議会が神戸であつた時に、ミッシヨンの晩餐会が関西学院の新しい会議場―おそらく講堂だろうと思ふんですが―で開かれたおりに、ハーバートも参加しております。そのことは姉のグレースに宛てた手紙に書かれています。こういう具合にハーバートは、大学へ入る前のカナディアン・アカデミーに在学中に、関学と関係を持っていたことがまずございます。そしておそらくそういう縁があつて一九五五年に本学で講演することになつたのだと思われませう。

関学講演

ハーバートは当時ニュージーランドの公使として在任中でありましたけれども、その休暇を利用して神戸にやつて来て兄の家に滞在していました。その間にどういふ具体的な経緯があつて関学で講演をすることになつたかということについては、今のところよくわからないわけでありませうが、ひとつおもしろいことがあります。『クリオの顔』に次のような文章があります。「関西学院の歴史学科はわずか数年前にできたばかりだそうではありますが、それは関西学院の誰か偉い人が、それまで歴史学をあまり重要な学問

と考えなかったためであるとは考えられません」。これは非常にものすごく、要するに関西学院の文学部に歴史学科がやると数年前に出来たけれども、設置がこのように遅れたのは関西学院の指導者たちが歴史学というものを重要な学問と考えなかったためではないということを敢えて言っているわけです。こういういわば皮肉な文章をハーバートが講演の前に発言したとすれば、これはどういうふうな理解したらいいのかという疑問が生じます。

文学部十学科構想

実は関西学院が新制の大学として再発足したのは一九四八年のことです。法学部・経済学部・文学部の三学部体制で関西学院は戦後新制大学として再発足をいたしましたけれども、その時に文学部は七学科体制で発出したしました。哲学科・神学科・心理学科・教育学科・社会科学・国文学科・英文学科の七学科です。『百年史』を読まさせていただきますと、当初は、むしろ文学部は、七学科ではなくて十学科として発足する構想があったようです。つまり七学科の他に美学科と西洋史学科と日本史学科の三

学科を併せて十学科体制で発足する構想があったのですが実際には七学科として発足が決まったようです。

その後一九五一年になって当初の計画である西洋史学科と日本史学科が一本化されて、史学科として発足いたします。そしてその翌年、五二年には美学科も発足します。こういう形でまがりなりにも一九五二年には、当初の十学科構想が実現いたします。しかし、なぜ一九四八年の新制大学の再発足の時に構想にあった文学部十学科構想がつぶれて、七学科構想になってしまったかということについては、『百年史』には書いてございません。読み手としては、なぜそうなったのだろう、どういう事情があったのだろう、ということが知りたいわけですが、正史は事実を述べるだけで、やはりそういうことについてはどうも書き辛いのか、書く必要が無いと判断されたのか書いてございません。そこが外史的な視点では気になるところであります。単に学科発足の準備が整わなかっただけかもしれない。

ハワードとグエン

その、いわば構想に当初あった西洋史学科と日本史学科

が、他学科と足並みをそろえて発足できなかったという事実を念頭において、ハワードの経歴を少し見てみたいと思うのですが、ハワードというのは、カナダのビクトリア・ア・カレッジを出ております。ハワードはビクトリア・カレッジで英文学と歴史学を専攻いたしました。その後イギリスのケンブリッジ大学のウェストミンスター・カレッジに入学してそこを卒業するわけですが、ケンブリッジでは、彼は神学を専攻いたします。従ってハワードという方は英文学、歴史学、神学という三分野を広く専攻した人です。しかしハワードは関学では、英文学それから神学の担当者となり最終的には神学教授としてその席を占めるわけでありますが、彼のキャリアの中にあつた歴史学を在任中には担当しなかつたようです。つまりハワードの持つていた能力の中では、歴史学の能力を関学は生かさなかつたわけです。従って、ハワードは文学部の発足時にも、また五年に史学科が出来た時にもその教授にはなりませんでした。

次にハワードの奥さんのグエンですが、グエンは、カナダのマクギル大学を卒業しています。グエンは、マクギル大学で歴史学とドイツ語の優等賞を獲得していますので非常に優秀な学生であつたと思います。そして、さらに大学

院に進学いたしましたして、大学院では西洋の中世史を専攻してMAの学位を取得しております。従って、グエンは歴史学とドイツ語の能力を持つていた人でありませんが、関学では最初は法学部の英語担当教師として採用されました。これは一九五二年のことです。一九四九年に文学部が七学科体制として発足した時にも、そして一九五一年史学科が出来た時にも、その任には呼ばれませんでした。英語担当教員、つまりグエンが持つていた能力からすれば、歴史学もドイツ語能力も認められずに彼女の母語である英語の担当教員という形で関学に迎えられたというわけです。しかし、グエンは一九五四年に文学部西洋史学科の助教授に就任いたします。従ってグエンは、最終的には大学院のMAの資格つまり西洋中世史専攻者としての資格に関学が注目して、五四年からその任に当らせたということになるわけです。

こういうハワード、グエン夫妻の経歴と関学での処遇とということをご付度いたしますと、おそらく五五年にハーバードが関学で講演をするにあたってハワード、グエン夫妻が何らかの関わりを持つたであろうと推測がきます。それだけではなくて、先程読み上げたハーバートが講演の前にその関学の史学科について皮肉な言葉を発した事情は、こ

ういうハワード、グエンの関学での位置と申しますか処遇というようなことと関係していなかったであろうかというのが、私の下衆の勘ぐりであります。それを資料によって実証することは出来ませんけれども、ハーバートのそうしたある種皮肉な発言というのは、ハワードかまたはグエンの情報と黙諾がなければおそらく話せなかったことであろうと私は考えております。

天羽徳之助

さらにハーバートの講演にあたっては、当時法学部で英語を担当されていた天羽徳之助さんが、ハーバートの講演用のローマ字原稿を作っておられます。天羽徳之助さんという方が、どういう人であったかということにも興味を持ちまして少し調べ始めたのですが、資料を余り集められませんでした。分かっていますのは、一九四六年の十一月から四七年の三月まで、短い期間でありますが進駐軍検閲局新聞部翻訳係を大阪でされております。その後に関学の理工専門部の専任講師となられ、五〇年には短期大学の専任教師となられ、五三年四月にやっと関学の法学部の助教授に迎えられました。そういう経歴を持っておられる方です

が、天羽さんとハーバートの縁が、どういふところで結ばれたのかというのが私の知りたかったところでもあります。今のところそれをしっかりと示す資料は見つかっていません。進駐軍におられたというようなこと、この時代にもちろんハーバートは、東京で総司令部の活動に関わっていたわけですから、そういうことの経緯の中で関係があったのか、進駐軍時代は関係がなくてハワードあるいはグエンさんとの関係で天羽さんとハーバートの関係ができたのか、そのへんも今のところはわかっておりません。

天羽さんはハワードの本をじつは翻訳しておられます。『人間解放』という本です。この本は、天羽さんが翻訳され、福音館というところから出ました。天羽さんの退職記念の雑誌が法学部から出されたのですがそれに載っている業績リストには、どういうわけかこの『人間解放』は載っていません。これは天羽さんの意思に拠って載っていないのか、あるいは業績リストを作った法学部関係者が見落としたのかどうかはわかりませんが、天羽さんとハワードのいわば縁を伝える作品であるはずの『人間解放』が無視されていることは奇妙なことです。

歴史と教養

次に、講演内容のことを簡単に申しあげたいわけですが、ハーバートは次のように聴衆に問いかけております。歴史というものは暇な人、閑人がもてあそぶ遊戯であつて実用的でも実利的でもないから廃れてもいいという意見が歴史以外の学問に従事する人びとの間で多いけれども、本当にそうなのだろうか。そういうように問いを發しております。ハーバートの答えはもちろん否であります。ハーバートによれば「歴史的な感覚を所有しない人は教養ある人ではありえないといつても過言ではない。歴史に対して真の興味を有しないかぎり、いつまでたつても無教養な人間であるほかない。世界がうまく行かないのは、人びとの心が元来よこしまであるというよりも広い意味での教養が欠けているからである」とハーバートは言っています。ここで言われている教養というのは、ハーバートによれば、「知性と寛容と理性」とを備えるということです。そして歴史的感觉というものはもちろん個人でもそうでありすが国民も持たなければいけないというのがもうひとつのハーバートの主張です。すなわち「歴史を正しく理論的に認

識しているということは国民にとってきわめて大切なこと」なのだと言っております。そのことは「その国民の団結と力とを維持し」「文化と業績に誇りを持った勤勉な国民」になるための条件だからです。逆に「誤つて、ないしはゆがめられて伝えられた歴史は、結局は国運衰退の原因となる」と述べています。従つて近視眼的で熱病的な自国の歴史解釈というものが国をあやまらせるのです。その実例は、例えばムツソリーニやヒットラーに見られると言つています。ハーバートは、慎重にムツソリーニやヒットラーだけを挙げて日本の戦前の軍国主義のことは言っておりません。それは、おそらく遠慮とかそういうものがあつたと思ひますが、しかし日本人に向かつてそのことを言ひたかつたに違ひないと思ひます。講演はそれ以外にもいろいろ示唆に富むことを言っておりますが、要は、個人としてであれ国民としてであれ歴史的感觉を持つということは、個人的な教養であるとともに自国の歴史や文化的な業績に誇りを持つことになる。それは他国の文化や歴史に対して同じ様に公平な評価をすることにもなる。そうした歴史的感觉に育まれた教養は、結局は自国の力といひますか、彼は「国運」なんていう、わりかし古くさい言葉を使つておりますが、国運を高めることになつていくのだというの

です。

反響いざい

この講演が関学でどのように受け止められたかということにも私は非常に興味があるわけでありますが、これを伝える資料がなかなか見つかりません。唯一ありそうだと思いますのは、学生が出してありました『関西学院新聞』です。その一九五五年六月五日号に、このハーバートの講演が載っているようです。ところが関学の大学図書館にあります『関西学院新聞』は、非常に欠号が多くて残念なことにこの六月五日号はありません。そういうことでこの新聞を私は見ることが出来ないので国会図書館とかいろんな所を探索いたしましたけれども、どこも『関西学院新聞』は持っておりませんでした。やはり本学が責任を持ってこういうものは集める必要があるのだらうと、今回改めて思いを強めました。

ハーバートの自死

それでは、時間も押しつまっておりますので先を急ぎた

いと思います。

ハーバートは、ご存知のようにカナダの大使として最終的にカイロに赴任するわけでありませうけれどもそこで自殺を遂げました。この悲劇的最後ということもやはり日本人の心に響くひとつの事実ですが、そういう面からもハーバートの生涯に注目する人たちがたくさんいると思います。そのハーバートが、いわば自死に至る過程というものは比較的よく知られておりますから詳しくここでは申し上げませんけれども、一九八九年の社会主義体制の崩壊以来、世界の冷戦体制が終わりましたので、冷戦時代の空気なんていうものはなかなか実感として私のような戦後育ちのものにはわかりにくいわけですが、その冷戦体制下においていわゆるマッカーシー旋風、有名な赤狩りの旋風がアメリカに吹き荒れました。そのマッカーシー旋風にハーバートは巻きこまれてしまいました。そして第二次中東戦争の最中にエジプト大使としてカイロに赴任することになったという彼の運命が重なって、彼は自死に至ったわけでありませう。その自死に至る最大のいわば攻めて側の材料は、ハーバートがケンブリッジ大学にいた時に共産党に関わったのではないか、具体的には入党していたのではないか、そしてケンブリッジから帰ってアメリカでハーバード大学

へ入りますけれども、その時代にもいわば共産主義者たちと関係を持ったのではないか、ということでした。こういうことがアメリカの議会で槍玉にあがるわけですが、事実からいえばハーバートは、ケンブリッジ時代に共産党に入党しておりました。兄ハワードへの手紙のなかで、自ら告白しています（工藤美代子『悲劇の外交官』二九七頁）。しかしそのことを彼は終生隠し通したわけです。そのことがおそらく心理的には自死に至るひとつの重要な要素にはなったと思います。その評価については、いろんな人がいるんなことを申し上げておきますので、私は今日あらためて申し上げます。

ハーバートの遺書

ハーバートは自殺を遂げる前に遺書を書いておられます。兄ハワードに宛てた遺書の中で言っていることは、三つあると思います。ひとつは、自分はキリスト教がたった一つの真実の道であるということは今再び確認したということです。もうひとつは、自分はカナダの政府関係者として、つまり大使として秘密を守るといふ公務員の誓いを裏切ったことはないということを書いて、改めて身の潔白を主張

しています。そして三つ目として、自分が死に追い込まれるのは、いわば「guilt by association」によると言っています。「guilt by association」は法律的には「巻き添えによる罪責」ということですが、むしろ「連想による罪責」の意味ととりたいと思います。つまり若い時代に共産党なりあるいは共産主義の運動に関わったであろうという、そういう推測でその後の公務員としての活動もおそらくそれを引きずってスパイであったに違いないというような、そういういわば非常に荒っぽい連想によって自分は濡れ衣を被せられているのだということです。

ハワードの追悼文

弟の遺書を受け取った兄のハワードは、弟について追悼文を二つ書いておられます。ひとつは「My Brother」という題で死の直後の一九五七年に英文で書かれたものですが、これは最終的には公表されませんでした。その中でハワードは、「弟は国家公務員の秘密厳守の誓いを破っていない」と述べています。つまりハーバートが死をもって訴えたかったことを兄として再確認といえますか、保証するというそういうことを申し述べておられます。次には、自分

の弟に対する無念の思いを吐露しています。弟は、若い日の軽率さというものを病的なまでに神経質に考える臆病さを持つていたとして、弟の性格評価を書いております。しかし、過去は過去として通過点として割り切る強さというもの人間には必要なのだと、そういう強さが弟になかったということハワードは非常に残念がっております。結局弟は、繊細さと人々からの非難を恐れる小心さに押し潰されてしまったのだということです。

その後ハワードは、「弟の死について」という短文を『兄弟』という関学の関係する雑誌に寄せております。ここではどういふことを書いているかと申しますと、ひとつは内村鑑三に対する批判です。内村は、キリスト者は汚い政治の場から遠ざかって、政治を政治家みたいなものに任せておけばいいのであって、高潔なキリスト者というものは、そういう政治の場からは逃避すべきなのだということを書いていきます。ハワードはこうした見方を批判します。内村の言うような態度を取ると「誠実な政治家」を孤立させてしまうことになるからです。したがって、キリスト者が政治の場から逃避する態度は正しくないのだと言っています。そして「誠実な政治家」の例として弟のハーバートを政治の場で守ったカナダの外務大臣であるピアソンの名

をあげています。ピアソンという人は、ハワードの大学時代の恩師でもあるわけですが、そのピアソン外務大臣の態度を賞賛し、また彼が弟を守ってくれたことに感謝の辞をその短文の中で述べております。そして弟が死に至ったのは、直接の告発人よりも、その告発を黙視していた人たちが多くいたからなのだ、こうハワードは言いたかったようであります。それは恐怖や政治的な慎重さやあるいはパリスイ的優越感から正義のために戦おうとしない人たちが、そういう政治に背を向け無関心の態度を取る人たちが、じつは弟を死に追いやった隠れた共犯者だとハワードは指摘しております。従って、象牙の塔から出て政治に向かわなければいけないとまで言っております。

ハワードの“*My Brother*”と「弟の死について」というこの二つの文を読み比べるとトーンの違いに気がつきます。英文の方では、ハワードの性格的な弱さというものに對する兄としての痛恨の思いを表明すると同時に、他方で弟の公務員としての潔白さを内外に主張するというこの二つが基調をなしています。それに対して、日本語の「弟の死について」は、もちろん潔白も主張しておりますけれども、むしろ弟を死に追いやった人たち、それはもちろん意図的に追いやった人たちではなく結果として追いやった人

たちに対する間接的な批判といえますか、そういうものにむしる力点があつて、そういう目に見えない力から弟を守ろうという意志が表れていて、弟に対する心情がよく出ている追悼文だと思ひます。

嵐のなかの知識人

以上がハーバートの講演と彼の自殺を巡ることについての話であります。このマッカーシー旋風についてももう少し申し上げたいことがあります。例のチャップリンも「ライムライト」という作品―見られた方もおられると思いますが―を作り上げた直後に、アメリカの議会の非米活動委員会に召喚を受けます。しかし、チャップリンは、自分分は反米的な活動をしているわけではないとその召喚を拒否します。そのため彼は事実上のアメリカからの追放処分を受けて、その後何年もアメリカに帰ることが出来ませんでした。チャップリンは、このマッカーシー旋風の中で召喚拒否という態度を取ったひとつの例であります。

それから皆さんご存知だと思ひますが、ローゼンバーグ夫妻は、原爆のスパイ容疑をかけられて処刑されました。ハーバートは自死を選びましたけれどもローゼンバーグの

場合は逮捕処刑という運命を辿りました。さらに日本人では、菅季治という現在の筑波大学、昔の東京文理科大学を出た哲学者がいました。この人は戦後シベリヤに抑留されて苦勞をするわけですが、彼はロシア語が堪能であつたために収容所で通訳をしておりました。その時に共産党の当時の徳田書記長のいわゆる徳田要請問題が起こります。徳田の言をロシア語で「要請」と訳したのか、それとも「期待」と訳したのかというたつた一語の訳し方をめぐつて、帰国した後、国会に召喚されて彼は責められます。彼の抗弁は聞きいられず、それを苦にして彼は中央線に飛び込んでしまいました。菅季治の死もまたアメリカに於けるマッカーシー旋風と対をなす日本における戦後の通常右旋回と呼ばれているあの時代の犠牲者の一人です。

それからハーバートの友人であつた都留重人さんが一九五七年の三月、偶々ハーヴァート大学から招かれてアメリカにいたためにハーバートの問題で召喚されて証言をするわけですが、その都留重人の証言の態度、ハーバート、チャップリン、ローゼンバーグ夫妻、菅季治、そういう人たちを並べて、この時代における知識人の現実―もつと具体的には政治―との向き合い方というものについては、研究に十分値することだらうと思ひます。

時間が来てしまいましたけれども、もう少しよろしいでしょうか？

ダニエルと関学

それでは、次は父、ダニエルのことを少しお話ししたいと思いますのですが、ダニエルは「長野のノルマン」Norman of Naganoと言われるくらいに、終生を長野における布教活動に捧げた人として今日でも追慕される人です。ハワードは父を記念して『長野のノルマン』という本を書いています。その英語名はNorman of NaganoでNorman in Naganoではありません。つまり、「長野におけるノルマン」ではなくて「長野のノルマン」だという一言にノルマンの人生が語られていると思います。このダニエルはじつは関学の理事も勤めております。一九一一年に理事に就任している資料が見つかりましたが、それ以前から理事であった可能性があります。それから断続的に一九二九年まで理事であったことも確かです。しかし残念なことに、理事としての活動を伝える記録がありません。むしろ、ダニエルはアウトターブリッジさん等のような、当時関学の主導的な人物の影に隠れて、それが意図的に陰に隠れるという

生き方をしたのかどうかそれはわかりませんが、少なくともダニエルは、関学人としては正史に名前が残るような有名な人ではなかったようです。『百年史』の筆者たちも、理事としてのダニエルには関心を払っていません。

人種偏見

ダニエルという人は、自らは著書は残さなかったわけですが、時局に応じて自由な発言を残しています。ひとつは人種差別問題であります。簡単に言いますと、日本人を含む東洋人が西洋人に対して劣っているというそういう西洋人の偏見に対してダニエルは、そんなことはない、日本人というのは、むしろカナダ人やアメリカ人以上に命を大切にしている人たちなのだということを、自分は日本での経験からよく知っていると言っています。書物や何かによって日本人をそう知っているといるのではなくて、自分の日本での生活の中で日本人のそうした側面を知っていると言います。日本人や東洋人に対する偏見に対して批判をしております。おそらくこの人種に対する公平な見方は、ダニエルが先程家系図のところでも少し申し上げましたように、彼の祖父さんがイギリスからの移住者であったそのことと関係し

ているように思われます。ダニエルは、若い時代に父の故郷であるサマーセットの従兄弟のところへ尋ねた折に、従兄弟からカナダ人というのは「インディアン」の血を引いているものだと思っていたけれども、ちっともそんな顔つきをしていなくて自分たちと同じ様な顔をしている、という様な事を従兄弟から言われたようであります。それくらいに当時のイギリス人は、カナダ人を「インディアン」の血を引く人たちだと思ひこむことで、カナダ人にも「インディアン」にも二重の人種的偏見をもっていました。さらにカナダ社会における自分達のあり方、イギリスとの関係のあり方、そういうものがおそらく日本人や東洋人に対するとらわれない見方を形成することに力があつたのではないかと推測いたします。

明治の歴史教科書問題

第二にはクリスチャンが、第一次大戦時に戦争協力していることに対してダニエルは批判の言葉を残してあります。第三には歴史教科書問題について発言をしております。一九一一年に喜田貞吉が国定歴史教科書に南北朝並立説を書きました。このことが国会で問題になり、執筆者で

ある喜田は休職に追い込まれ、当該教科書の使用禁止という措置が取られます。最終的にはこの問題は、南朝が正当な天皇家の王朝だということで決着を見ます。この歴史教科書問題についてダニエルは、事実に基づかない偏見によって歴史記述をする国というのは、非常に危ぶいと書いています。一九一一年というのは、大逆事件の翌年であります。大逆事件と同じ年に日韓併合がなされます。そしてその翌年にこの歴史教科書問題が起こりました。それを受けてダニエルは極めて批判的な発言を残しているわけです。戦後になって歴史教科書問題が繰り返しが国で起つていますが、ダニエルの発言は示唆的だと思います。近くは一九八二年、それから一九八六年、そして今年です。このように繰り返される歴史教科書問題というもののその中身はともかく、なぜわれわれはこういう具合に明治以来繰り返して歴史教科書問題というものを抱え込むのかということをやはり考えてみる必要があるように思います。

宣教師引揚げ問題

時間の関係で次に進みたいと思いますが、宣教師の引き揚げ問題というのが起こりました。第二次大戦がだんだん

深刻化してまいりました一九四〇年秋に、日本におります宣教師たちが母国に帰国するかどうかということをめぐつて宣教師団が協議したようです。その時に帰るべきだという人たちと、日本に留まるべきだと主張する人たちとの間で意見が対立して結論が出なかったのですが、その時に宣教師としての休暇を終えて日本に帰ってきたアルフレッド・ストーン、この人もまたダニエルと深い縁がありますけれども、この人が恐怖心にうろたえてはならないという主張を当時の宣教師たちに向かってしたようです。つまり、帰るべきか留まるべきかという時に、恐怖心から帰る道を選んではいけないという原則論を主張したわけですから、われわれの経験でもよくわかりますけれども、原則論というものは得てして強硬論になりやすいものです。おそらくストーンがこの時の主張はある種の強硬論であります。それに対してダニエルたちは、日本に宣教師が留まり続けることは、宣教師を慕って教会や自宅を訪れる日本人に非常に迷惑になる。官憲から睨まれてスパイ疑惑を持たれてしまう。そういう日本人に迷惑をかけるから、自分たちは帰国の道を選ぶべきだとして、それを実行します。ストーンの原則論、強硬論に対してダニエルたちはいわば現実論の立場に立った、あるいは原則を保持しつつ柔軟に対応したの

です。そういう面ではバランス感覚に富んだ、しかも日本人と日本の政治のあり方というものをよく知った判断をしたのではないかと私は思います。

日本人隔離政策批判

じつはダニエルのこうした発言というものは、ダニエルが本国に送った手紙類の中でそれがわかるわけですが、ハワードはこういうダニエルの手紙を集めてきて『長野のノルマン』の中に書き込んでいます。ということは、そういう発言をしたのはもちろんダニエルであります。ダニエルの発言に注目したのはハワードですから、ハワードもまた父ダニエルのそういう態度や意見というものに、大いなる共感を持っていたからこそ父を讃える著書の中に書き残したのだらうと思います。つまりダニエルの基本的なそういう考え方をハワードもまた共有していたとみなしていいのではないかと思います。そのひとつの証拠としてハワードは、ダニエルとともに一九四〇年の末にカナダへ帰国いたしますけれども、アメリカと同様にカナダでもカナダにいる日本人はキャンプに隔離されます。このときにハワードは、現地にあつて日本人隔離政策を批判いたします。そ

のこの重みというものを、戦後のいわばアメリカにおける日本人隔離政策に対する経緯を見れば、いかにハワードの態度が勇氣あるものであったか、あるいは識見に富んだものであったかということが、今日よくわかるわけであります。ハワードはそういう人でした。

無教会主義の研究

またハワードは、無教会主義の研究をしてそれを後に博士論文に纏めるわけですが、これも注目すべきことだと思います。もちろんハワードは、メソヂストですから無教会主義の立場に立たないわけでありませうけれども、無教会主義に対する偏見を持たずになぜ日本において無教会主義が定着したのかという、そういういわば研究的態度からこの問題に向き合います。結論的にハワードが言っていることは、キリスト者であってもやはり社会的存在という人間が持つている本性からは免れない。従って、キリスト者も何らかの組織がある。そこで教会ということになるのだと思います。そういうキリスト者が教会を必要とするのは、人間というものには、もともと社会的存在だからそのことによるのだというのがハワードの見解であります。そしてハ

ワードは、先に申しましたようにこの無教会主義の研究で博士号を得るわけですが、それはグエンと共に関学を辞職して一時帰国をしている間のことです。その後、また日本へ帰って来て塩尻アイオナ教会を設立しました。なぜ関学をハワード、グエン夫妻が辞めることになったのか、あるいは辞めようと決意したのかその間の事情についても今のところよくわかっておりません。もちろん、『百年史』はそのことには触れておりません。

望蜀の『百年史』

最後に結びだけを簡単に申し上げておきます。ダニエル家のことなどは、そこに書いておきましたのでもう省くことにしまして、今回この話を依頼されている調査をいたしました。冒頭に申しましたように、池田さんにもいろいろお手伝いをいただいて、いろんな資料を集めることは出来たのですが、しかし、なにせ基本的な資料が極めて不十分だということに改めて知りました。関西学院は百年以上の歴史をもちますけれども、関西学院に関係してきた人たちの仕事、つまり著作であれ論文であれあるいはその活動に纏わることに對する資料類の保存、整備ということ

がもう決定的に遅れていると思います。そういう面では、組織的に今やらなければ、時間が経てば経つほど資料の収集は難しくなるだろうし、そのためには財政の支援というものが必要でしょうから、関学のしかるべき地位にある人たちは認識を持っていただきたいと思います。

第二に、正史というものはどうしてもそうでありましてけれども、指導者たちやあるいは有名な人たちを中心とする歴史になってしまいます。齋藤史の歌に「正史見事につくられてゐて物陰に生きたる人のいのち伝へず」というのがあります。『百年史』は良く書かれていますですがそれでも『百年史』では関学に関わった女性たちに対する視点が全くと言っていいほど欠落しています。さらには学生については、騒動とか事件といった面ではよく取り上げられますが関西学院における学生の位置とか学生をどういうかたちで教育するかという非常に具体的な視点とか論とかいうものが『百年史』では弱いように思われます。

第三に私はクリスチャンではありませんので、この『百年史』を読んで、キリスト教の理念にたつ教育とは何かということを学ぼうといたしました。しかし、私の読み方が浅いのだと思いますが、私はその十分な答えを得ることが出来ませんでした。この問題は、関学にとっては重要なこ

とですので、私も更に『百年史』の読みを深めたいと思っています。

井上 どうも有り難うございました。

司会の方から要約をする必要はないと思いますので、ノーマン家の人々をハーバートを軸に置きながらお話いただきました。ずいぶん私の知らないことが多くありましたし、とりわけ今回のご報告は、ただ単に関学の歴史の中で彼らがどう活躍したというよりも、それをふまえて現在日本で起っているさまざまな問題にも関心を向けられた竹本さんに現在汲みとるべき教訓をも引き出していただきました。

何かご質問があれば是非頂戴したいと思います。はい、どうぞ。

安田 ハーバートさんは、赤狩りで自殺に追い込まれたということに興味を覚えました。彼自身はキリスト教の教えが最終的真理であると思っておられたということですが、若き時代の左傾思想をお持ちになった頃のお考えは、その晩年には若気の至りで間違っていたと思われたの

か、いやそれは正しいんだということを心の中で思いながらその両立に悩んでおられたのか、そのへんの内心の葛藤を知りたいと思います。どのように理解しておられるかわかりでしたらお教えいただきたいと思ひます。

竹本 一研究者として発言をする時にはそれを裏付ける資料がないといけないというのは当然のことですし、また一人の人間の心中を推し量るといふことは非常に厳しいことです。ですので軽々に申せませんが、そういう限定付きでお聞きいただきたいと思ひます。ハーバートは、若き日に持った社会的な関心あるいはコミュニズムとある種のコミットメントそのことが誤りであったとは思っていなかったと思ひます。しかし自分の若き日の思想を公務員になつてからも持ち続けたかというところではない。やはり公務員として自分の生き方を貫いたと思ひます。ただ若き日のそういう事実を、戦後になつて政治の中で彼が公人であったがために突かれたといひますか利用されたことに対してどういふふうに対処するかというその身の処し方には悩んだと思ひます。その葛藤が死へ導いたとは思ひますけれども、最終的に彼はキリスト教の信仰というものを改めて強調しておられますから、キリスト教的真理を確信していたと思ひます。

安田 都留重人さんが、アメリカで左傾的活動をしたと思われる人たちについての証言をどこかでされたという話がありました。それはどんな場所で誰に対して行われたのでしょうか。

竹本 エマーソンが一九五七年三月十二日にアメリカ上院の国内治安小委員会というところに喚問をされました。そこでノーマン批判が再燃するわけですが、それを受けて都留さんが喚問され、三月二十六日と二十七日の二日にわたつて証言をいたしました。

この証言の直後に日本では都留さんが若き日の友人を裏切つたのではないとかいふ批判が出てきましたけれども、証言記録を読みますと委員の脅かしのよな質問に対して誠実に答え、しかもハーバートを気づかいつつ証言しておりました。都留さんがハーバートを売つたというよなことは、まったくの中傷だと思ひます。

安田 その証言記録は見ることは出来るんですか。

竹本 雑誌『世界』の一九五七年六月号に載っております。

井上 よろしゅうございますか。他の方でございますか、はいどうぞ。

森本経済学部教授 ちょっと雑談的なことになるんですけど

れども、関学ではハワードさんはノルマンさんというふう
にずっと呼ばれておって、今日の資料でもダニエルの方を
ノルマンと書いてありますが、英語式に言えばノーマンで
すね、岩波の本もノーマンと書いてあるんですが、何故な
のかなと前から不思議に思っておりました、ひょっとして
アイルランド出身ということが何か関係あるのでしょうか
ね。

竹本 ケルト系であればノルマンというふうに発音すると思
いますが、詳しいことはわかりません。

森本経済学部教授 ご本人も、ノルマンという呼び方を受
け入れておられたと思うんですけれど。

竹本 関学ではそうですね。

森本経済学部教授 それともうひとつは個人的な話になる
んですが、一九五五年いうと、私は大学の三年生で在学し
ていたはずなんですけれども、今日お聞きするまでその講
演会があったことさえ知りませんでして非常に残念なこと
をしたと思っておりますが。

竹本 そうですね。(会場笑い)……

森本経済学部教授 ただ、ハワードの奥さんのグエンさん
は、非常な美人で、短髪で男の人みたいな髪形で、ギリシ
ヤ系の顔で、すごい美人だったですよ。そのせいではあり

ませんけれども、文学部のグエン先生のラテン語の講義に
しばらく出席したことがあります。私は長続きしませんで
辞めてしまいましたけれども。

井上 その他何かございませんでしょうか。どんなことで
も結構ですのであれば……。今回のお話は来年の三月に学
院史編纂室が発行する『関西学院史紀要』の中の歴史サロ
ンのところで掲載する予定になっております。ご関心あれ
ばそれを入手していただき、聞き逃しになったところを文
章で読んでいただければ幸いです。

それではどうも有り難うございました。(拍手)本当に長
い間、竹本先生どうも有り難うございました。

ノーマン家の人々の生と挫折

—『関西学院百年史』外伝—

経済学部 竹本 洋

I はじめに

- 副題の「外伝」…「正史」と「外史」
- 主題の「挫折」…裁断と共感(傲慢と想像力)

II ノーマン家と関学との縁

⇩家系図

III ハーバートの関学講演 (一九五五年五月二三日)

1 講演の経緯

- (a) ハーバートと関学との関係—カナディアン・アカデミー時代— ⇩資料

- (b) ハワード・グエン夫妻、とくにグエンとの関係

—関学文学部史学科発足遅延問題—

● ハワードの皮肉 ⇩資料

● 一九四八年 新制大学関西学院 法・経・文 三学部体制で発足

文学部七学科 (哲学・神学・心理学・教育学・社会学・国文学・英文学)

⇩当初構想一〇学科 (七学科+美学・西洋史学・日本史学)

一九五一年 史学科 一九五二年 美学科

● この事実の経緯⇩『百年史 通史編Ⅱ』(一一二—一三頁)で記述

⇩当初構想が破綻した事について沈黙(正史の問題)

● Howard

Victoria College (英文学・歴史学専攻)、Westminster College, Cambridge (神学専攻)

⇩関学(英文学・神学教授)⇩歴史学専攻のキヤリア関学評価せず

● Gwen

マクギル大学歴史学・独語で優等賞⇩大学院で西洋中世史専攻(MA)

⇩関学(法学部英語担当「一九五二年」)⇩

歴史学のキャリア「史学科」発足時に評価されな
かった

↓一九五四年 文学部西洋史学科・助教授就任

(c) 天羽徳之助との関係 ↓ 資料

2 講演内容 ↓ 『クリオの顔』 岩波文庫

- 歴史は「閑人のもてあそぶ遊技」であり「実用的でも実利的でもない」から廃れても良いか？
- 「歴史的感觉を所有しない人は教養ある人ではありえない：世界がうまく行かないのは、人々の心が元来よこしまであるからというよりも、広い意味での教養が欠けているからである。それは知性と寛容と理性が欠けているからである。」

● 「国民が自国の歴史を正しく理的に認識していることはきわめて大切である。」そのことは「その国民の団結と力とを維持し」「文化と業績に誇りをもった勤勉な国民」になるための条件である。
逆に、「誤って、ないしはゆがめられて伝えられた歴史は、結局は国運衰退の原因となりうる。」

↓ 「近視眼的」で「熱病的」な自国の歴史解釈の実

例 ムツソリーニ・ヒットラー

3 講演の影響

唯一の資料である『関西学院新聞』（一九五五年六月五日号）の欠号

IV ハーバートの自死

1 自死へいたる事情

- (a) 冷戦とマッカーシー旋風／第二次中東戦争
- (b) ケンブリッジとハーバート時代の活動 ↓ ケンブリッジ時代に入党（秘匿）

2 ハーバートの遺書とハワードの追想文

- (a) ハワード宛遺書
 - 「キリスト教がたった一つの真実の道」
 - 「秘密を守る誓いを裏切ってははいない」
 - 「guilt by association が、私を押しつぶしてしまった」

(b) ハワードの追悼文（二つ）

“My Brother”（英文・未発表）一九五七年

- 弟は国家公務員の秘密厳守の誓いを破っていない
- 「若き日の軽率さ」を「病的なまでに神経質に考える―臆病さ」

⇔「過去を通過点と割り切る」強さ

↓ハーバートの「繊細さ」と「人々からの非難を恐れる小心さ」

「弟の死について」(『兄弟』一九五七年六月号)

- 内村鑑三批判

キリスト者の「政治の場からの逃避」(内村)

⇩ 誠実な政治家は「孤立」

- 弟を政治の場で守ったピアソン外相の態度を賞讃・感謝

- 弟の死の共犯者

「恐怖や政治的な慎重さあるいはパリサイ的優越感から正義のために戦おうとしない」としない人たちが

- 「象牙の塔」から「政治」の政界へ

3 チャップリン・ローゼンバーク夫妻・菅季治とハーバート

ハーバート

- 一九五〇年四月 菅季治投身自殺
- 一九五二年 チャップリン、アメリカから追放
- 一九五三年六月 ローゼンバーク夫妻処刑
- 一九五七年三月 都留重人証言

V ダニエルの仕事

1 「長野のノルマン」Norman of Naganoと関学理事

- (a) “Norman in Nagano”でないことに注意↓現在でも長野で追想される存在
- (b) 関学理事としての活動不明
- 一九一一年(?)理事就任〜一九二九年(?)まで
- アウターブリッジなど当時の関学の指導的人物の「影」に隠れて(自主的?)いる⇩『百年史』の著者たちも注目しない

2 人種差別 カナダ人と日本人(アジア人)

- 一九〇八年 東洋人(日本人)は西洋人より劣る理由 ①東洋人は「不道德な人間」

②「生命」を大事にしない

反論 カナダ人やアメリカ人よりも日本人のほうが「生命」を大事にしていることを、経験的に知

っている

一九一四年 青島陥落に対する日本人の「紳士的」祝賀態度を賞讃

●第二次大戦時の、日本人の外国人排斥の態度に「困惑」

↓ 第一次大戦と第二次大戦の日本人観の「微妙な」変化

● Daniel が父の故郷である Somerset を訪れたとき（二八八五）、従兄弟から「カナダ人はインディアン
の血を受け継いでいると思っていた」といわれた体験、つまりカナダ移住民の子であるという立場 ↓
人種問題への公平な目を育てたのではないか？

3 クリスチャンの戦争協力

第一次大戦時（一九一四年）に、クリスチャンが「武装平和」の美名に酔って、戦争に協力していることを批判

4 歴史教科書問題

● 一九一一年、喜田貞吉筆の「国定歴史教科書」の「南北朝併立説」が国会で問題化

● 応急処置 ①喜田休職 ②教科書使用禁止

● 最終決着 ↓ 「南朝正当説」

● ダニエルの批判

↓ 事実に基づかない「盲目的感情・偏見」にもとづく歴史既述の歪曲を批判

● 繰り返される歴史教科書問題

5 宣教師の日本引き揚げ問題（一九四〇年秋）

● 一九四〇年に戦時態勢が進展し、外国人に対する圧迫が深刻化

↓ 宣教師団は、日本に「踏みとどまる」べきか、「退却」すべきか協議したが、結論を得られなかった。

● 一九四〇年秋に休暇を終えて日本に帰ってきたアルフレッド・ストーンは、「恐怖心に怯えたりしてはならない」という「原則論」を主張

● 「原則論」は往々にして「強硬論」になりやすい。
Howard = Daniel は、日本に在留を続けることがクリスチャンの日本人に迷惑をかけることになるとして、A. Stone の強硬論を批判 ↓ 帰国の道を選択

VI ハワードとグエンの仕事

1 ダニエルとハワードとの思想の共有

- (a) カナダでの日本人隔離政策（戦時中）に対するハワードの批判（中野）

2 ダニエル家の人々と「組織」

「長」として号命をかける立場を回避

3 実践と信仰とのかかわり

(b) 無教会主義の研究（一九五七―五八）↓博士論文

（一九六一）

4 ハワード・グエン夫妻の伝記と研究↓ハーバート研究へ

- 無教会主義に対する「批判」よりも、日本における無教会主義の定着の理由と現状の「研究」

5 『百何十年史』のために

- 人間の「社会的存在」としての本性は、キリスト者も免れがたい

↓キリスト者も「何らかの組織」を必要とする

- ① 関学関係者の著作・資料、および関学の基礎資料（『関西学院新聞』など）の組織的収集と整備 ↓ 財政的基盤

2 関学辞職と塩尻アイオナ教会の設立

この経緯と関学にとってもつ意味については、『百年史』は当然無視

- ② 正史から除外された人々―関学の女性たち―
- ③ キリスト教理念に立つ大学教育とは？―「大学の危機」との関連で―

VII むすび

1 ダニエル家の人々と「政治」

「関与」よりも「向き合う」↓例外 ハーバート

【A】 歴史の効用と楽しみ

上掲四篇が戦後日本滞在中に行なった講演のテキストないし論稿であるのに対して、この一篇はニュージブラントにカナダの高等弁務官（連邦相互間の大使）として一九五三年七月に着任してから半年後の十二月八日、ウェリントンWellingtonの教員養成大学 Teachers Training College で行なった終業講演の原稿である。英語の表題は “History: Its Uses and Pleasures.” タイプ用紙一六枚からなる。

著者は一九五五年五月ニュージブラントから夫人を一時カナダに帰国させて、休暇のため単身日本を訪れた際、当時関西学院大学神学部教授であった実兄ハワード・ノーマン方に約一カ月滞在する間、五月二十三日関西学院大学で、同じ内容の講演を日本語で行なった。日本語講演としては五回目である。その講演用のローマ字原稿（タイプ用紙一六枚）を作ったのは当時関西学院大学教授（現名誉教授）の天羽徳之助氏であった。天羽教授が著者の求めにより、ローマ字文を日本語に書き直されたのが、『思想』一九五五年九月号に発表された「歴史の効用と喜び」である。これが新書版『クリオの顔』に現在の表題のもとに再録されたのである。従って本篇の訳者は天羽教授である。

この再録に当り、編者は訳者の承諾を得てかな遣いと漢字の用法を改めた。全集への収録について、訳者天羽氏は取り扱いを編者に一任された。

〔E・H・ノーマン『クリオの顔』岩波文庫、二〇六頁、一九八六年〕

【B】

関西学院大学における講演には前置きがあった。天羽氏のローマ字原稿から書き直すと次のとおりである。

「私が少年時代、神戸のカナダ学校（カナディアン・アカデミー）に通っておりました時に、旧関西学院は私たちの学校から手のとどくようなところに在りました。それで私は昔の構内や校舎をよく知っております。その講堂へ演奏会をききにいったこともありますし、カナダ学校の野球チームの一員として中学部と試合したこともありますし、ドクター・アウトアブリッジをはじめ、旧関西学院の先生方を沢山知っております。このような関西学院につらなる古い記憶はすべて懐かしい思い出であります。そして、この懐かしい思い出ゆえに、今日こちらへ参りまして、私は非常に愉快的気分浸っております。そして、その

懐かしい関西学院が大きくなったことをきいて喜ぶとともに、そこに学ぶ皆さん方に向ってお話してできるということは、ひとつの大きな光栄と感ずるものであります。

関西学院の歴史学科はわずか数年前に出来たばかりだそうですが、それは関西学院の誰かえらい人が、それまで歴史学をあまり重要な学問と考えなかつたためであるとは考えられません。しかし実際、皆さんのうちに、歴史はいつたい何の役に立つものであるうかと時に訝いぶかる人があると思います。ところが一方、科学に対する一般の態度は全く別であります。」

〔E・H・ノーマン『クリオの顔』岩波文庫、二〇七頁、一九八六年〕

【C】

こちらのミッションでは評議会があつて、お父さんはここに来ています。彼は今夜、長野に発ちます。

ミッションは関西学院の新しい会議場で、晩餐会を主催しました。みんなそれぞれパートナーを選びました。マクウィリアム氏が僕のパートナーでした。ディナーの後で、ちよつとした会がありました。この夏は、僕は速記を習う

つもりです。それから、たくさん勉強します。

グレースは、チャイコフスキーのピアノ曲で、シャンソン・トリステを知っていますか？僕はもうこの曲を、ほとんど空で憶えています。とてもきれいだと思います。

先月、僕は、歴史、聖書、算数の科目で高校の方へ飛び級しました。テンチ氏が、この三科目で飛び級するチャンスを与えてくれました。僕はクラスで一番でした。平均点は八十九点です。

あと十八カ月たつと、また僕たちは会えますね。どうぞお元気で。

あなたの愛する弟

E・ハーバート・ノーマン

〔E・H・ノーマンから姉グレースへの手紙（一九二四年四月二五日）、工藤美代子『悲劇の外交官』岩波書店、六頁、一九九一年〕